ぽつぽのお手帳

鈴木三重吉

一

すゞ子のぽつぽは、二人とも小さな〳〵赤いお手帳をもつてゐます。この二人は、「黒（くろ）」よりもにやァ〳〵よりも、「君（きみ）」よりも、だれよりも一ばん早くから、すゞ子のおあひてをしてゐるのです。

一ばんはじめ、或（ある）冬の、氷のはつてゐる寒い日に、二だいの大きな荷馬車がお荷物をつんで、ぽつぽたちのながく住んでゐた村から、町の方へ、こと〳〵出ていきました。ぽつぽは、あのまゝかごにはいつて、その二ばんめの荷馬車の、一ばんうしろに乗せられてゐ

ました。二人は、一たいどこへいくのだらうと言ふやうに、しきりにきよと〳〵くびをうごかしてゐました。

お父さまはそのときぽつぽに言ひました。

「二人ともおとなしくして乗つてお出(い)で。こんどは海の見えるお家(うち)へいくんですよ。」と言ひました。

「そして、そのお家(うち)へ、小ちやなすゞちやんが生れて来るのですよ。」と、小石川(こいしかは)のお祖母(ばあ)ちやまがそつと二人におつしやいました。ぽつぽは、

「お祖母さま、お祖母さま、そのすゞちやんといふのはだれでございます。」と聞きました。

お母さまは、だまつて、たゞかるくわらひながら、

みんなと一しよに車に乗りました。

ぽつぽは、それからこんどのお家(うち)へつきました。そのじぶんには、すゞ子の曾祖母(ばあばあ)は、まだ玉木(たまき)の大叔母(おばあ)ちやんのところにいらつしやいました。あき子叔母(をば)ちやんもまだ来てゐませんでした。おうちには、千代(ちよ)といふ小さな女中がゐました。

ぽつぽは、せんとおなじやうに、お部屋のそとの、ガラス戸のところにおかれました。このお家(うち)は、おもてからはいつて来ると、たゞの平家でしたけれど、上へ上つて、がらす戸のところへいつて見ると、そのお部屋のま下が広いおだいどころで、そこからはお部屋

はちようど二階のやうになつて、つき出てゐました。

そのお部屋のぢき目のまへは砂地でした。そして、そのすぐさきが海でした。ぽつぽはガラス戸の中から、どんよりした青黒い海を、びつくりして見てゐました。まつ正面の、ずつと向(むか)うの方には、小さな赤い浮標(うき)がかすかに見えてゐました。

その向うを、黄色いマストをした、黒い蒸汽船が、長い烟(けむり)をはいて、横向きにとほつていきました。二人のぽつぽは、

「おや〳〵、あんな大きな船が来た。おゝ早い〳〵。ぽツぽウ、ぽツぽウ。」とおほさわぎをしました。

お母さまはこのお部屋へおこたをこしらへて、小さなすゞちやんが生まれてくるのをまつてゐました。そして千代と二人ですゞちやんの赤いおべゝをぬひました。

暗い冬はそれからまだながくつゞきました。昼のうちは、おもてのじく〳〵した往来を、お馬や荷車やいろ〳〵の人がとほりました。それから、お向ひのうどんやで、機械をまはすのが、ごと〳〵ごと〳〵と聞えました。

しかし夜になると、あたりはすつかり穴の中のやうにひつそりとなつて、たゞ、海がぴた〳〵と鳴るより

ほかには、何の音も聞えませんでした。

暗い海の中には、星のやうなあかりがたつた一つ、ちかり〳〵と消えたりとぼつたりしました。それは、昼に赤く見えてゐた、あの浮標（うき）の上にとぼるあかりでした。

ぽつぽは、そんな晩には、さびしさうに、夜でも、

「ぽッぽウ、ぽッぽウ。」となきながら、

「すゞ子ちやんはまだおうまれにならないのですか。いつでせう、いつでせう。」と聞きました。

二

そのうちに、だん〳〵と五月が来ました。海の空もはれ〴〵とまつ青(さを)に光つて来ました。

お母さまは、ネルの着ものに、青いこうもりをさして、千代(ちよ)をつれて、そこいらへ買ひものにいきなぞしました。

往来には、もういつの間にか、つばめが、海の向うから来て、すい〳〵とかけちがつてゐました。電信の針金にもどつさりとまつてゐました。

お父さまは、すゞちやんはいつ生れるのでせうねと、

よく、小石川のお祖母（ばあ）ちやまとも話し〳〵しました。
お家（うち）のちかくには、高井（たかゐ）さんのおばあさまといふ、
それは〳〵よいおばあちやまがいらつしやいました。
そのおばあちやまが、とき〴〵おみやをもつていらし
つて、小石川のお祖母ちやまとお二人で、早くすゞち
やんが生まれるやうに、いのつて下さいました。
すると、六月の或（ある）晩でした。お母さまには、あすは
すゞちやんが生れるといふことがわかりました。お父
さまも、それはよろこんで、すぐに小石川のお祖母ち
やまに来ていたゞきました。
でも、ぽつぽにだけは、みんなだまつてゐました。

ぽつぽがよろこんで、あんまりおほさわぎをするとうるさいから、あとでそつと見せてやることにしたのでした。

その晩お母さまは、すゞちやんの寝る小さな赤いおふとんをちやんとしいて、そのそばへやすみました。

お父さまがあくる朝日をさまして見ますと、ちやんとすゞちやんが生まれてゐました。まつ赤なお顔をした、小さい赤ん坊のすゞちやんは、一人で赤いおふとんの中に、すや〳〵とねてゐました。お父さまは、よろこんで、

「お祖母さま、小さなすゞちやんが生れて来ました

よ。」と言つてよびました。お祖母ちやまは、かけていらしつて、

「あら〱かはいゝすゞちやんね。」と言つて、それは〱およろこびになりました。すゞちやんはそれからしばらくたつて、はじめてお母さまにお乳をもらひました。

すゞちやんは、とき〲「おぎア〱」と泣きました。それから、「おふんにやい〱」と言ふやうにも泣きました。

ぽつぽは、はじめてすゞちやんの泣き声を聞くと、

「あれはだれでせう。ぽツぽウ、ぽツぽウ。」と、しき

りにお父さまに聞きました。お父さまは、「あれはすゞちやんだよ。こんど生れた赤ちやんだよ。」と言ひました。すると、ぽつぽは、よろこんで、「おやさうですか。」と、ぱたぱたおほさわぎをしました。そして、「早く見せて下さい。早く早く。」と二人でねだりました。

しかし、すゞちやんは、まだたうぶんは、そつとねかせておかなければならないので、ぽつぽのところへつれていくわけにはいきませんでした。

ぽつぽは、まいにちまいにち、

「どうぞすゞちやんを見せて下さい。早く見せて下さい。」と言つて、かはる〴〵ねだりました。それで或(ある)日お父さまは、すゞ子をそつと、おふとんにくるんで、ぽつぽのかごのまへにつれていきました。そして、

「すゞちやん〳〵、ごらんなさい。これがおまいのぽつぽだよ。」と言ひました。ぽつぽは、

「すゞ子ちやん〳〵こんちは。」

「すゞ子ちやん私(あたし)もこんちは。」と、それは〳〵おほよろこびでかう言ひました。

でも、まだ小ちやなすゞちやんは、まぶしさうに目(めんめ)をつぶつて、おぎア〳〵といふきりで、ぽつぽを見よ

うともしませんでした。すゞちやんは、たとへそのとき目（めんめ）をあけても、まだ、ぽつぽどころか、お父さまもお母さまも、なんにも見えなかつたのでした。だれでも小さなときは、目（めんめ）があつても見えないし、お手（てて）があつても、かたくちゞめて、ひつこめてゐるだけです。ちようど、足（あんよ）があつても、大きくなるまではあるけないのとおんなじです。

そのうちに、だん／＼と暑い八月が来ました。海はぎら／＼と、ブリキを張つたやうにまぶしく光つて来ました。すゞちやんは、昼でも、小さなおかゝやの中にねてゐました。

お母さまは、お部屋の鏡だんすのふちから、ねてゐるすゞちやんの目（めんめ）のま上へ横に麻糸をわたして、こちらの柱のくぎへくゝりつけました。そして、赤いちりめんのひもの両はしに、小さな銀の鈴をつけて、それをその糸へつるしました。

すゞちやんは、目（めんめ）がさめて、かやをどけてもらふと、黒い、きれいな目（めんめ）をあけて、その赤いひもをぢいつと見てゐました。お母さまはときぐ〵立つて、そのひもをこちらの方へ少しひいて見ました。

さうすると、すゞちやんの黒い目（めんめ）は、すぐに、はすかひにこちらの方を見ました。こんどは向うへやると、

すゞちやんはまた黒目をうごかして、そちらの方を見ました。鈴はひもがうごくたんびにりん〳〵となりました。お母さまは、

「まあ、ちやんと見えるのですね。」と言つて、うれしさうに笑ひました。お父さまは、こちらのいすにかけて見てゐました。お部屋の三方には、まつ白な、うすいカーテンがかゝつてゐました。その中に、すゞちやんの着てゐる赤いおべゝと、つるした赤いひもとが、きわだつてまつ赤に見えました。

三

お父さまは、それからまた或日(あるひ)、すゞちやんを、ぽつぽのまへへだいていきました。ぽつぽはよろこんで、「すゞ子ちやん、すゞ子ちやん、こんちは。ぽツぽウ、ぽツぽウ。」と言つて、おじぎをしました。

お父さまは、「こつちよ〱、すゞちやん。こつちをごらんなさい。」と言ひながら、すゞちやんをかごのまへにすゑるやうにして、ぽつぽを見せようとしました。しかし、すゞちやんは、片手をかためてしやぶりながら、ちが

つた方を向いたきり、いくらをしへても、ちつともぽつぽを見ようとはしませんでした。ぽつぽは、
「まあ、まだ〳〵お小さいんですね。いつになつたら、すゞちやんが、ぽつぽやとおつしやるでせうね。」と、さも、まちどほしさうにかう言ひました。お母さまは、
「ほんとにいつのことでせうね。」と言ひながら、お乳の時間が来たので、すゞ子をおひざにとりました。
「なに、ぢきですよ。今にすゞちやんが一人で、ぽつぽのところへ来るやうになりますよ。」
ちようどいらしつてゐたお祖母(ばあ)さまは、かうおつしやりながら、お乳をいたゞいてゐるすゞちやんの、黒

い髪の毛をおなでになりました。

「あゝ、ぽつぽに、いゝものを上げてよ。」と、お母さまは、ふと思ひ出したやうに、帯の間から、小さな赤いお手帳を出してぽつぽにわたしました。

お父さまとお母さまとは、いつもすゞちやんが早く大きくなつてくれることばかりまつてゐました。ぽつぽも、そのことばかり言つてまつてゐました。

その十一月に、ぽつぽは、また、すゞちやんや、みんなと一しよに、ちがつた町の方へ遠く引つこしました。それは、ちか〴〵に玉木(たまき)の大叔母(おばあ)ちやんが、はる〴〵曾祖母(ばあばあ)をつれて、すゞちやんを見に来て下さる

からでした。そして、あき子叔母（をば）ちやんもお家（うち）の人になるので、すゞちやんの生れたお家（うち）ではせまくてこまるからでした。

　すゞちやんは、とき〴〵あき子叔母ちやんのおひざにだかれて、ぽつぽのかごのところへいきました。ぽつぽはこちらのお家（うち）でもまたガラス戸の中へおかれてゐました。すゞちやんは、ぽつぽのかごのわきに立つちをさせてもらふと、ちようどお口がふちのところへ来ました。すると、すゞちやんはいつの間にか、ちゆッ〳〵と、ふちをしやぶつてゐました。それから、お手（てて）にもつてゐるがら〳〵をふりました。

「まア、すゞ子ちやんは、先(せん)から見ると、ずゐぶんおほきくおなりになりましたね。」

ぽつぽはかう言つて、叔母ちやんとお話をしました。

それからまた寒い冬が来ました。その冬があけると、すゞちやんはそろ〳〵はひ〳〵をし出しました。それからまた青い八月がまはつて来ました。すゞちやんは、歩いてはたふれ、歩いてはたふれして、よち〳〵ともう十足(とあし)ばかりあるけるやうになつてゐました。そのときには、すゞちやんを見たい〳〵と言つておほさわぎをしてゐられた曾祖母(ばあばぁ)も、もうこちらへ来ていらつしやいました。

或日、すゞちやんは、よち〳〵とおすだれのそとへかけて出ました。あき子叔母ちやんは、
「あら、あぶない。」と言ひながら、あわてゝおつかけていきました。すゞちやんはもう少しでたふれるところを、ばたりと、ぽつぽのかごにつかまりました。
「すゞ子ちやん、こんちは、ぽッぽゥ、ぽッぽゥ。」と、ぽつぽがおじぎをしながら二人でかう言ひました。するとすゞちやんはかごにつかまつたまゝ、そのまねをして、
「ぽッぽゥ、ぽッぽゥ。」と言ひ〳〵おじぎをしました。
あき子叔母ちやんは、それを聞いて、

「おや、今のはすゞちやんでせうか。」と、ふしぎさうな顔をして、ぽつぽに聞きました。ぽつぽはにこ〳〵笑ひながら、

「えゝ、おしまひのはすゞ子ちやんですよ。まァおじやうずですこと。さあ、もう一ど言つてごらんなさい。ぽツぽウ、ぽツぽウ。」と、言ひました。すゞちやんはまたまねをして、

「ぽツぽウ、ぽツぽウ。」と、おじぎをしました。あき子叔母ちやんはびつくりして、

「あら、まあ、ほゝゝ。ちよいと、すゞちやんがぽッぽウ、ぽツぽウつて言ひましたよ。」と、思はずおほき

な声でお母さまをよびました。すゞちゃんはその声にびつくりして、

「わァ。」と泣き出しました。

これは、すゞちゃんが口を利いた一ばんのはじまりです。お父さまやお母さまはそれを聞いておほよろこびをしました。ぽつぽもそれはよろこんで、来る人ごとにその同じお話をしました。

すゞちゃん、あの二人のぽつぽは、こんなときからのぽつぽですよ。

お母さまは、もう先（せん）のお家（うち）のときに、すゞちゃんの生れてから今日までのことで、二人のぽつぽのしらな

いことは、すつかり話して聞かせました。ぽつぽは、それをみんな、お母さまにいたゞいた小さな赤いお手帳へつけておきました。二人が見てしつてゐることは、もとよりすつかりかきつけてゐます。

ですから、すゞちやんは、大きくなつて、ごじぶんの小さなときのことがわからないときには、いつでも、ぽつぽのお手帳を見せておもらひなさい。

にやァ〱や、黒(くろ)が来たのは、ぽつぽにくらべればずつと後のことです。にやァ〱は、すゞちやんが、やつとはひ〱するころに、或をぢちやんがもつて来て下さつたのでした。黒は、たつたこなひだ、お家(うち)の

犬になつたばかりで、もとは、そこいらののら犬だつたのです。そのつぎに、一ばんおしまひに、君（きみ）がおも、、りに来たのです。

底本：「日本児童文学大系　第一〇巻」ほるぷ出版
１９７８（昭和53）年11月30日初刷発行
底本の親本：「鈴木三重吉童話全集　第五巻」文泉堂書店
１９７５（昭和50）年９月
初出：「赤い鳥」赤い鳥社
１９１８（大正７）年７月
入力：tatsuki
校正：伊藤時也
２００６年７月19日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。